

想像界の生物相

龍に生まれ変わる

のぶ た としひろ
民博 グローバル現象研究部 信田 敏宏



資料名 | 彫像 (つむじ風の精霊)

標本番号 | H0276395

地域 | マレーシア

サイズ | 高さ 9 cm



資料名 | 彫像 (龍の精霊)

標本番号 | H0000164

地域 | マレーシア

サイズ | 全長 169 cm

これらの彫像は、マレーシアの先住民オラン・アスリの一グループであるマー・ムリの男性が制作したものである。マー・ムリの人びとは首都クアラ・ Lumpur 近郊のカレイ島に暮らしているが、なかでもブンブン村は男性のほとんどが彫像制作にたずさわる村として有名である。彼らの優れた彫刻技術は世界的に知られており、ユネスコから賞を与えられた作家もいる。

◆◆オラン・アスリの精霊◆◆

村びとは、「人は亡くなると『果実の島』とよばれる天国のような場所で暮らすようになり、精霊となって現世に生きるわたしたちを見守っている」と信じている。これは、亡くなった人の霊魂がこの世に生まれ変わるといふ輪廻転生の考え方に基づいている。死者の霊魂はサルやフクロウなどの動物や、バッタやクモなどの虫、バナナやカボチャなどの植物として生まれ変わるといふ。つまり、彼らの周囲にあるものはすべて祖先の生まれ変わりなのである。そうした信仰から、彼らはサルを食べるときもバナナを食べるときも、それらを祖先が与えてくれた恩恵として敬い、大切に扱う。

精霊はモヤンとよばれているが、モヤンとは厳密には「祖先」を意味することは

である。モヤンには「モヤン・ブアヤ」(ワニの精霊)、「モヤン・カチャン」(豆の精霊)など、ひとつひとつ名前が付けられており、それぞれ違った役割がある。動植物だけでなく、大嵐などの自然災害についても、モヤンの仕業と考えられている。大嵐が起こると、ふだんは優しい「モヤン・プティン・ブリオン」(つむじ風の精霊、右頁上)が怒って、自分たちに何かを伝えようとしているのだという。

右頁下の写真は、モヤン・ナガとよばれる龍の精霊である。想像上の動物である龍も人の生まれ変わりなのである。龍は、人がその背中を歩けるほど巨大で、ひとたび動けば、大地が揺れ動き、地震が引き起こされると恐れられており、次のような逸話も残っている。村の男性が狩猟のため森に入り、獲物が得られず洞窟で休んでいたときのことである。

頭上から液体が落ちてきて、最初は水かと思ったが、よく見てみると、赤い血であった。あわてて外に出て振り返ると、洞窟と思っていたのは龍の口のなかであった。びっくりして、その男性は村に逃げ帰ってきたという。

◆◆形を変える彫像◆◆

華人の旧正月から一カ月後に設定される「モヤンの日」、村びとは祖先たちの霊(彫像)を祀る儀式をおこなう。儀式のクライマックスでは、民族楽器の演奏が鳴り響くなか、伝統的な歌とともにモヤンの仮面をかぶった男性があらわれ、女性たちが輪になって踊り始める。近年では観光客を招いておこなわれているが、精霊の仮面や彫像はもともとこうした儀式のために使用されるものなのである。

彫像は、マングローブ林に生育する木々を材料としているが、アブラヤシのプランテーションの拡大やゴルフ場開発のため、マングローブ林は年々減少しており、彫像の材料を得るのが難しくなっている。そのため、彫像の大きさは、だんだんと小さくなってきている。



上：彫像制作の作業場(2005年)
下：「モヤンの日」の儀式(2003年)